

令和 3 年 8 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00672

研究課題名(和文) 歴史的な視点から見た現代英語の存在文の諸相

研究課題名(英文) Existential Sentences in Present-day English in the Diachronic Context

研究代表者

家口 美智子 (Yaguchi, Michiko)

金沢大学・外国語教育系・教授

研究者番号：20340854

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：there存在文に関する研究課題 存在文におけるsubject raising特にbe bound toに関する現象と、there+NP+AP/-ing/-enを明らかにするという2つの課題を設定したが、3つの論文を執筆することができた。2本は出版したが、1本は投稿中である。では、there+be+bound+to+beという構文が使われる頻度が高い理由を突き止めた。では現代英語ではthere+NP+ing/-enは、一般の存在文と同様な文脈で使われていることを発見した。よって-ingや-enがNPの後に来ても機能、数の一致や使われる環境はほとんど変わらないことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2つの研究成果が得られた。1点目は、thereを主語としてみなすことで、フレーズや動詞が文法化を起しているときのメカニズムを明らかにすることができた。be bound toとthereの相性の良さは定型表現化していることが起因となっていることがわかった。2点目は、there+NP+ing/-enが進行相や受動態を表すのではなく、spend+time+ing/-en構文の中の-ing/-enのように準述詞として機能していることが考えられ、存在文の進行形や受身形は果たして存在するのか次の研究課題を提示することができた。面白い現象を提示することができた点で、学術的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This project has two purposes: 1. to clarify subject raising verbs/phrases which are used in there existential sentences; 2. to clarify the functions of there + NP + -ing/-en structures in present-day English. Three papers were produced, two of which were published. In 1, the research found the reason why be bound to is used the most often in semi-auxiliaries in present-day English. In 2, it was found that the contexts in which there+NP+ing/-en are used are very similar to those of ordinary existential sentences. This could lead to a hypothesis that there+NP+ing/-en is actually a structure in which -ing and -en small clauses are not the main elements in the sentence. This research found that although Quirk et al. (1985: 1409) say it is progressive or passive structure, the results show that it is not.

研究分野：英語学

キーワード：文法化 静的文法化 定型表現化 存在文の進行形 存在文の受身形 raising verb

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代英語における there 存在文はその特性からか主に生成文法の理論的側面から研究されることが多い文法項目である。結果として、研究を開始した 2018 年度当初において歴史的な発達という観点を入れた現代英語における存在文の研究はほぼ存在していなかった。また、there 存在文に raising verb としてどのような準助動詞が挿入されるかを調査した研究もほとんどなかった。また、there+be+NP+AP/-ing/-en という構文に関しても、実際どのように発達し、どのような文脈で使用されるものかということは解明されていなかった。筆者が 10 年以上存在文の歴史的な発達を研究して得た知見を基に現代英語における存在文の謎を明らかにすることが重要であった。

2. 研究の目的

存在文の中で、構造の解析が難しい構文がある。例えば、there's+NP+been (例: There's a man shot) のような構文は Lakoff (1987: 563) は構造を解析することはできないとしているが、there 接触節 (例: There was a farmer had a dog) から発達した構文であると家口 (2017、2019) は議論しているが、このように、歴史的な変遷を見ると、現代英語における謎が解明されることがある。本プロジェクトは、準助動詞の中で存在文における raising においてなぜ be bound to が突出して多いのか、存在文は文法化の中でどんな役割を果たしているのか、there+be+NP+AP/-ing/-en (例: There is a man sick/sitting/killed) とはどのように発達し、現代英語でいかなる文脈で使われる構文なのかを明らかにすることを目的にした。

3. 研究の方法

様々なコーパスが作成されるようになったが、本研究は Corpus of Historical American English 及び Corpus of Contemporary American English を解析した。2 にあげた構文を取り出し、一つ一つ例文を確認してデータを取った。更に先行文献を調査して今までの知見を把握し発見した現象の説明に努めた。

4. 研究成果

以下の成果を上げることができた。

発表論文

1. 「アメリカ英語における be bound to の準助動詞化の過程」(2020) 『英語コーパス研究』 27:53-72.
2. 「grow to be/verb について: grow up to be/verb との違いから見えるもの」(2021) 『言語文化論叢』 25: 23-46.

口頭発表

1. 「歴史的な発達から見る存在文」2018 年度 JACET 学習英文法研究会第 2 回例会 2019 年 3 月 15 日
2. 「There's a man been shot, hasn't there? (Lakoff 1987: 563) の構文解釈から見えること」日本英文学会第 91 回大会 2019 年 5 月 25 日
3. 「grow to be/verb 構文と grow up to be/verb 構文はどう違うのか？」英語語法文法学会第 28 回大会ワークショップ 2020 年 10 月 17 日

上記の論文に加えて、以下の論文は投稿中である。

「存在文の進行形と受動形再考」投稿中

以下のことが明らかになった。

1. be bound to はより頻繁に使用される be supposed to や be likely to と比べ、there を主語に取る割合が極めて高い準助動詞である。Corpus of Contemporary American English で納められた現代英語では be bound to のトークンの内 7.4% は there を主語に取る。ちなみに、be supposed to は 1.0%、be likely to は 2.3% である。7.4% は非常に高い割合であり、この現象は 1950 年以降 be bound to の使用頻度自体が下がる中、there+be+bound+to+be が定型表現化しているために起きていると突き止めた。be bound to は Mair (2004) が定義する static grammaticalization (静的文法化) という状態で現代英語で推移している。すなわち、頻度が減少する中、義務を表す lexical な意味を表す用法もまだ健在であるものの、文法化をした認識用法が主として用いられている。そのような中、there+be+bound+to+be の相対頻度が 1920 年代から上昇し続けていることから定型表現化してい

るという原理以外では説明できないとした。

2. 準助動詞や動詞が文法化を起し、raising の構造を取り始めるときに主語に there を取る構文がまず現れ始めることがわかった。上にあげた論文「アメリカ英語における be bound to の準助動詞化の過程」で、be bound to の文法化は 1870 年に受動態の初出が見られ、そして 1881 年に主語 there の初出が見られる形で明らかになったが、このような無生物主語が現れることは、それまで生物主語しか取れなかった義務用法の be bound to が認識用法に発達した証拠になることを議論した。また、一旦、there を主語にとって文法化を起しかけても、また lexical item に戻ってしまい、there を主語として取らなくなる現象があることがわかった。be obliged to や grow to などがそうである。これは上にあげた論文の「アメリカ英語における be bound to の準助動詞化の過程」と「grow to be/verb について：grow up to be/verb との違いから見えるもの」で論じている。1900 年代初期まで be obliged to や grow to も there 主語が取れていたが、1950 年以降はそのような文型は消えた。面白い現象である。今後動詞や準助動詞、あるいは be required to、be expected などの頻度の高い表現が文法化を起す現象を研究するのに貴重な示唆を得た。(例えば、There is required to be a manual のような文は現代英語では非文である。)

また、「アメリカ英語における be bound to の準助動詞化の過程」では there 主語だけでなく、ing 主語、to 不定詞主語、what 主語、what 節主語、it be Adj that/to の it 主語に関しても出現順序を確認しているが、準助動詞の文法化の進行を探る手がかりとなるため画期的な論文となった。

3. Quirk et al. (1985: 1409) によると存在文の進行形と受身形はそれぞれ there+be+-ing + NP (例: There were standing a dozen hungry people in the rain) there+be+-en + NP (例: There was presented a gold medal (to the winner)) という文型だったが、現代英語ではそれぞれ there+be+NP+-ing (例: There were a dozen hungry people standing in the rain) there+be+NP+-en (例: There was a gold medal presented by the mayor) という文型が主流になったと説明する。別の言い方をすれば、Quirk et al. (1985: 1409) は、there+be+NP+-ing/-en は現代英語でも進行形、受身形であると主張していることになる。ところが、投稿中の論文「存在文の進行形と受動形再考」で、会話で使われる頻度、省略形 there's の使われる頻度を調査したところ、一般の存在文とほとんど変わらないことがわかった。また、これらの 2 つの文型では無作為に抽出したトークンでは NP が 5 word 以内の長さでありあまりフォーマルなコンテキストで使用されていないことがわかった。これらにより、-ing/-en が現在分詞や過去分詞が be と強く結びついた進行形や受身形ではない可能性が高いことがわかった。これは大室 (2015) 等で議論されている spend+time+-ing/-en という構文で見られる、time という名詞に続く -ing や -en が spend という動詞とともに現れる準述詞としての使用のされ方と同じではないかという議論ができる。ということになると、there+be+NP+-ing や there+be+NP+-en は進行形、受身形でないことになる。例えば、存在文の受動態を表す文型である there+be+NP+-en と there+be+-en + NP は中英語期から両者とも存在するが(進行形に関しては歴史的な発達が遅いため先行研究では解明されていない)、いつ頃から there+be+NP+-en が主流の文型となったかを調べることは今後の課題としたい。(spend+time+in+-ing/-en の in が消失する過程と時期が同じかもしれない。) また、そもそも存在文に進行相や受動態を表す文型は必要なのかについても考察することが今後望まれる。there+be+NP+AP に関しては使用頻度が少なくデータ取りが困難だったため、研究が及ばなかったのは残念であった。

また、完了を表す there+be+NP+pp (例: There is a man come) のような構文で、Yaguchi (2015, 2017) で come は be 動詞の結びつきは強く数の一致をする構文であると議論したが、実際はこの構文自体がカジュアル度が高い構文であるために使われる NP は単数形が多くなるという理由で数の一致率が高いことが判明した。同様に there+be+NP+-en は NP が抽象名詞が使われることが多いため、spend+time+in+-ing や一般の存在文に比べて、数の一致率が高いことがわかった。丹念に一つ一つのデータを検証することが大事であるとあらためて悟った。

以上、存在文を歴史的な視点から見ると、現在における存在文に関わる構文のふるまいに対して、歴史的発達から説明が可能になることがあるし、注目されにくい現象が実は面白い点を含むことが明らかになることがある。この点で本プロジェクトは面白い現象を多く提示できたので、学術的な意義があったと言える。また、今回のプロジェクトを行って得た知見が筆者の次への研究に結びついたことを記しておきたい。発表論文 1 と 2 からは、準助動詞の文法化における主語の変遷を調べる方向に研究のベクトルが向いた。また文法化を起しかけている動詞にも目が行くようになり、今後は Corpus of Contemporary American English を分析して直近 30 年動詞の変化にも注目していきたいと思っている。また、投稿中の論文「存在文の進行形と受動形再考」の研究をきっかけとし、存在文は指示物をディスコースに紹介し指示物の一時的な状況を表現する機能がデフォルトであると筆者は考えているが、更に marked に進行相や受動態を表す進行形や受身形の構文がわざわざ必要なのかを考えていきたい。

最後に国民の皆様からいただいた貴重な研究費があったからこそ面白いデータを提示できた。日本の政府と国民の皆様には深く感謝をしたい。

引用文献

Lakoff, George. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.

Yaguchi, Michiko. (2015) "There in There Contact Clauses Revisited." *Studies in Modern English* 31: 45-70.

Yaguchi, Michiko. (2017) *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach*. Tokyo: Kaitakusya.

家口美智子. (2019) 「There's a man been shot, hasn't there? (Lakoff 1987: 563) の構文解釈から見えること」日本英文学会第91回大会 2019年5月25日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 家口 美智子、YAGUCHI Michiko	4. 巻 27
2. 論文標題 アメリカ英語におけるbe bound toの準助動詞化の過程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語コーパス研究	6. 最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 家口 美智子、YAGUCHI Michiko	4. 巻 25
2. 論文標題 grow to be/verb について : grow up to be/verb との違いから見えるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化論叢 = Studies of Language and Culture	6. 最初と最後の頁 23 ~ 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00061562	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 家口美智子
2. 発表標題 歴史的な発達から見る存在文
3. 学会等名 JACET学習英文法研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 家口美智子
2. 発表標題 There ' s a man been shot, hasn ' t there? (Lakoff 1987: 563) の構文解釈から見えること
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 家口美智子
2. 発表標題 grow to be/verb構文とgrow up to be/verb構文はどう違うのか？
3. 学会等名 英語語法文法学会第28回大会ワークショップ
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関